
蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

紗夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼穹の竜騎士
ドラクエナイト

【Nコード】

N6072Y

【作者名】

紗夢猫

【あらすじ】

農村生まれの平凡な少年は、ある日を境に大きな時代の流れへと巻き込まれていく。出会い、別れを繰り返し、その先に待つものは平穏か、それとも… 初投稿作品です。誤字、脱字等お見苦しい部分を多く含むかもしれませんが、なまあったかい目で見守ってくださいと嬉しいです。

*11/25 *2500PV、ユニークアクセス600突破しました！これからもよろしく願います。

プロローグ（前書き）

この作品はあくまで架空であり、作品中にある都市、人名等は一切現実とは関係無いのでそのコトを忘れずに。

プロローグ

静寂。

風で揺れる木の葉の音と、時折聞こえる虫の声以外は何も聞こえない。

自分の鼓動だけがやけに大きく聞こえてうるさく感じる。

普段ならなんとも思わないその音も、かすかな音しかしないこの森の中では、十分すぎる程大きな音に聞こえてくる。そう、感づかれるんじゃないかと心配になる程に。

この場所で待つて2刻程。じつと身を潜め続けるのもそろそろ限界かもしれない。

”ここにはいないか？移動するべきか…”

そう考えた矢先、森の奥からガサリ…と音が。

「ヴフツ…フツフツ…」

音がした方をみるとそこには、1リルム(1m80cm)程もあるうかという巨大な体躯を持った生き物がいた。

ボア…四本の脚で歩き、顔には3リム(約54cm)程もある角を持ったその生き物は、この森の中では一際大きな体躯を持つ、この森の主と言ってもいい存在だった。

ボアは周囲を伺いながらゆっくりと目の前を横切り、この先にある水場へと歩いていく。

呼吸を抑え、ゆっくりと手にした弓に矢をつがえ、キリキリ…と限界まで引き絞っていく。このサイズでは、きつちりと急所となる首の付け根へと撃ち込まねば1撃では落とせない。ゆっくりと慎重に狙いを定め、その時を待つ。

ボアが目の前を通り過ぎた瞬間

ヴュンツ

風を切りながら飛んだ矢は、狙い通りに首筋に…

しかし、撃ち出す瞬間の殺気を捉えたのか、駆け出そうとしたボア。辛うじて外れず、後脚の付け根に刺さった矢の痛みに鳴き声をあげ、それでも倒れずにこちらを睨みつけてくる。

”チツ…それなら…ッ”

勢いよく茂みから飛び出た俺は、牽制に矢をもう一本放つと、腰からダガーを抜き放つ。

狙いは変わらず首筋。そこに刃を立てるべく、猛然と駆け出した。

プロローグ（後書き）

コツコツと更新して行こうと思います。
感想等お待ちしております。

平穩な日々

「くそ…重い…っ」

先程狩った獲物をなんとか背負いなんとかかかんとか村の入り口まで辿り着いた俺は、背負っていたボアの体を地面に置くと、その場でしゃがみ込む。

いくら血を抜いたとは言え、この大きさだ。しかも全身筋肉の塊と言ってもいい。並の大人より重いかもしれない。いや、重いだろ。それをここまで背負って歩いてきたのだ。少し休まないと何もできないかもしれない。

そんな事を考えていると、そこから村の住人が顔を出し始めた。「おうカイト、今日はまたえらくデカイ獲物を獲ってきたなあ！」そう言いながら、よくやったでもいいいたげに肩をポンポンと叩かれる。

「たまたま運がよかったただだよ。後で捌くから取りにきて」

「いつも悪いなあ。この村で狩りができるのは、もうお前しかないから」

「気にしないで。ベルクさんにはいつもお世話になってるし」

そう。この人にはとても世話になっている。父親を亡くしてから女手一つで育ててくれた母をずっと支えてくれていた、父親のような人だ。村の大人達が戦争にかりだされてからも、ずっとこの村を守り続けてくれている。

「悪いなあ。俺も、こんな体じゃなければ」

そういつて自分の左半身を見るベルク。

そう、なぜ大人達が戦争に行っているのに、彼だけがこの村にとどまっているのか。いや、『とどまれているのか』と言った方が正しいか。

彼は、隻腕だった。

身体中にいくつもの傷を負っている彼は、元冒険者だという彼は、自分が幼い頃に村の側で行き倒れていたらしい。それを村の皆が助け、介抱する事で、なんとか一命をとりとめたらしい。しかし、その事で片腕をなくした彼は、この村に留まり、村に恩を返すと言つて様々な事に手を貸してくれていた…らしい。

全ては村の人達に聞いた話だが。

そんな風に話をしていると、

村の奥から一人の少女が、両手にいっぱいの道具を抱えながら走ってきた。

「兄さん！どこまで行つたのよ！帰りが遅いから心配…つて…またこんな大きな獲物を…」

「ただいま、リリース。道具持ってきてくれたんだな、ありがとう。」

「あ…うん。はい、コレ」

そう言つて解体道具を渡してきたのは、妹のリリース。小言が多いのが難点だが、なかなか可愛い部類に入る女の子…だとおもう。見た目は。ただ、どうにも気が強く、村の男の子達には若干嫌われているような気さえする。

だから兄さんは…とか、いつもいつも…とか小言を言われながら、獲物を解体する俺。

…この子の旦那は大変だな…

とか他人事のように考えつつ、手際良く肉を切り出していく。

皮はなめして防具用に…このサイズなら皆に十分行き渡るかな…な…などと考えていると、

「聞いているの兄さん!？」

「はい、はい、聞いているよリリース。」

危ない、もう少しで拳が飛んでくる所だった。

あれは痛いんだ…

「だから、もう無茶はしないでよね！？んじゃ、私は先に家に帰ってご飯の支度してるからね？」

そう言っただけで来た道に戻っていくリース。

「はあ…と思わず溜息をついていると、

「相変わらずだな。愛されてるじゃないか」

ニヤニヤとしながらこつちを見てくる男。

「うるせえよトリス。ほら、お前の分」

ひょいっと肉を投げ渡すと、

「おお危ない！と言いつつそれを軽々と受け取るトリス。

「あぶねえなあ、貴重な肉を…」

「お前が余計な事言ってるからだ。さつさと持って帰って、妹に食

わしてやれ。うちみたいな頑丈じゃ無いんだから」

そう。トリスには病弱な妹がいる。

トリスの所は両親共に亡くなっているから、トリスしか働くものはいないのだ。

へへっ、いつもありがとなっ！と、家へと帰っていく。

その後ろ姿を見ながら、あいつが妹もらってくれたらなあ…とか…

いかんいかん、なんか考えが親父化している。

気を取り直して解体を再開する俺だった。

平穩な日々（後書き）

ボアはイノシシのおっきいVrを考えてもどうとわかりやすいと思
います

暴虐の果てに

その日俺は、溜まっていた皮や牙等を近場の街に売りに出ていた。牙や皮だけじゃなく、村で採れた野菜や果物なんかも一緒だ。週に1度、こうやって街に出て、売ったお金で消耗品を買い揃えて戻る。どうしても、採れたものだけじゃ生活はできないから。

売れ残りや買った消耗品を馬車に載せ村に帰っていると、街道の向こうから、旅人らしき人影が必死に走って向かって来ていた。

「どうしたんだい？そんなに急いで」

「と…盗賊が…」

「盗賊!？」

戦争が起こってから、街や村では男が駆り出される。

そうして駆り出された男手の無い場所に、軍からの脱走兵や敗残兵が盗賊となって押し寄せる。今迄は戦場も遠く離れていたから比較的 안전한場所だったのだが…

「お前も、早く逃げた方がいい。これだけ荷物を抱えていたら、きつと見逃しては「ダメだ!この先に、俺の村があるんだ!」…そこは…もうダメだろう…俺が盗賊を見かけたのは、1刻も前の話だ…きつと…」

唇を噛み締め、それでも諦めないと馬にムチをくれる。

「おじさんは街の人達にその事を伝えてくれ!俺はいく!」

脳裏にいろんな顔が浮かんでは消えていく。

リス…母さん…ベルク…トリス…

俺がいった所で何ができるかはわからない。それでも、見捨てる事はできなかった。

半刻ほど走らせると、ようやく村が見えてきた。しかし、村の至る所から煙が上がっている。

涙がこぼれそうになるのを必死で抑え馬車を走らせていると、村か

ら何人かの人影が走り出てきた。

あの人影は…

「リーリース!!!」

「…ッ!…お兄ちゃん!」

馬車を止め、話を聞こうとする…が、

「あつちにいるぞお!!!」

「く…ッ!皆はこの馬車で街にいけ!おれが食い止める!」

「無茶だ!一人でなんて…」トリス!妹達を死なせる気か!?!…
でも…」

馬車から飛び降り弓に矢をつがえる俺に、なお渋るトリス。

「大丈夫だ、少しの間脚を止めたらおれもすぐに逃げる。森の中にはいれば俺なら逃げられる!早く行け!」

そう言うと馬に問答無用でムチをくれ走り出させる。

もう猶予はない。

「カイト!絶対!絶対死ぬんじゃねえぞ!!!」

…わかってる…こんな所で俺は死ねない!死んでやるものか!

馬車を追おうとする盗賊に矢を放ち牽制しながら、

必死に脱出手段を考えるカイトだった。

過酷な現実 - 1

「うう……ぐ……っ……」

ここはどこだ…？

ガタゴトと揺れる振動が身体に響く。

何処かに移動しているのはわかるが、自分がいつ、どうやってこの場所に来たかがわからない。

身体を起こそうとした所で身体の至る所に激痛がはしった。

「うあああああつ！」

「ダメよ！まだ寝てなきゃ！！」

そう言っただけで誰かが俺の身体を抑える。

誰だ！？いや、ここはどこなんだ！？

意識が徐々に覚醒するに連れて激しい痛みと疑問が浮かんでくる。

俺は確か、村を襲う盗賊から妹達を守ろうと…っ！？

そっだ、妹は！？

盗賊はどうなった！！？

再び身体を起こそうとするが、身体を襲う激痛のせいで思うように動かせない。

「ああ……が……ううう……ぐううう……！」

誰か、誰かあの人達を呼んで来て！！

ぼやける意識の片隅でそんな声を聴きながら、カイトの意識は再び闇に閉ざされていった…。

「ふむ…意識を取り戻したか。なかなか頑丈な奴だ。」
道端にボロボロになって倒れているのを見た時は、もう死んでいるかと思っただが…なかなか悪運が強いらしい。

しかし…この小僧がアレをやったというのだろうか…？

あの時の事を思い出して彼…デイルケンは寒気を覚えた。

街道を西に進んでいた彼は、街道沿いに横たわる幾つもの死体を横目に黙々と馬車を進めていた。

「…盗賊か…」

戦場はもつと東。本来であればこんな場所に盗賊が現れる事は滅多にない筈だが、それでも絶対とは言いつれない。

事実、この周囲を取り締まっている騎士の連中に捕まりさえしなければ、戦場に近い場所よりも安全に獲物を捉える事ができるだろう。巻き添えを食う事もない。

だが、これだけの人数がそうそうやられるものなのだろうか？

戦える大人達は皆戦場へと駆り出されている。

残った老人や女子供では盗賊に勝てる筈もない。

だからこそ”自分達のような仕事”もこうやって、堂々と街道を進んでいけるようなものなのだから。

ポツポツと転がっていた死体も途切れ、そのまま街道を進んでいた彼は、その先に一人の少年が行き倒れているのが見えた。

全身をボロボロにして、至る所から血が流れ出している。片手には

弦の切れた弓、反対の手には無骨なダガーが握られていた。

「…盗賊…にしては若い…」

そう言えば、街道沿いの死体には何本か矢が刺さったものがあつたが……

「まさか…こんな子供が……？」

いや、あり得ない。いくら盗賊とはいえ、戦場に出たこともあるだろう大の大人が、こんな少年にそうやすやすとやられるだろうか…

だが、現状ではそれしか考えられない。

隊列を止め、その少年の様子をみようとして…万が一にも死んではいるだろうが…近寄ると、かすかにその少年が身じろぎをしたように見えた。

「…おい、こいつに手当をして、馬車に放り込んでおけ」

不思議そうにしている手下に指示を出し、再び馬車に乗って走り出す。

8割…いや、9割がた死んでしまうだろうが、
もしも生き残れたら、いい”商品”になるかもしれない。

そう思考する彼の顔には、この商売をしている人間特有の邪悪な笑みが浮かんでいた。

再び目を覚ましたカイトは、大人達に連れていかれ、彼らの長である人物の前で跪かされていた。手と脚は鎖で繋がれており、自由に身動きする事ができない。

「お前、名前は？」

「…盗賊に名乗る名前はない…」

間髪おかず出した答えに一瞬虚を突かれたのか、目の前の男が目を丸くし、次いで大笑いしはじめた。

「何がおかしい！？殺すなら早く殺せ！奴隷になどなる気はない！」

男はそれを聞いて、今度はとても…本当に意地悪な、嫌らしい笑みを浮かべてこちらを見た。

「残念だがそれはできないな」

「何故だ！？」

「それはな、俺がその、奴隷商人だからさ。」

過酷な現実 - 2

曰く

お前は街道沿いに倒れていた

それを拾い

手当をして

看病をしてやった

あのままならば確実に死んでいただろう

その命を救ってやったのだから、それをどうしようが俺の勝手だ

そのあまりの暴論に異議を唱えようとすると、抑えていた大人から殴られた。

お前はもう奴隷なのだ。

その身体に奴隷の証も刻んであると。

そう言って改めて見せられたのは、己の右手。

その甲には見慣れぬ刺青が刻んであった。

自分が気を失っている間に、自分が人である事を辞めさせられていた。

反論しようとするやと殴られた。

奴隷が勝手に口を開くな…と。

そして聞かされた。

今いるのは、俺の慣れ親しんだ場所ではなく、そこから10ラギオ（200km）も離れた、大陸の中央部にさしかかる場所だと。

これから俺達は、山を越え、100ラギオ（2000km）先にある大陸中央部の国、ウィラスの首都、オフィリスへ向かうのだと。

まさか自分が4日も気を失っていると思ってもいなかったカイトは、その日、もう、今迄の日常には帰れぬのだと、そう理解した。

そして、あての無い、未来の無い、旅が始まった。

傷が治る迄は馬車に乗って。

傷が治ってからは、外で歩かされた。

お前より高く売れる女を馬車に載せるのだと言われて。

たまに村や街に着くと、

奴隷の中の何人かが連れていかれたり、
人数が増えたりもした。

口減らしの為や、身寄りの無い子供が売られて来たんだそうだ。

逆に、買われていった者もいた。

俺の看病をしてくれていた女の子も売られていった。

地方の領主の慰み者になるんだ…と、誰かが言っていた。

そうやって売られていくものは多かった。

男でも、その手の類で売られていく事も何度かあったようだ。

大抵は、力仕事をする為に売られていったようだが…

そうやって、周囲の人間が入れ替わっていくうちに、希望や、そもそもの思考能力すら奪われていったような気がする。

延々と歩かされ、

少し仲良くなつた人間も売られていき、

たまに野宿をする事になった日などは、
奴隷の中から何人かの女の子が連れていかれ、相手をさせられていた時もあった。

見た目がいいモノは手を出さずに高値で売るが、そうで無いモノはどうせ娼館に売られる。それなら俺たちが教え込んでやる…そう下卑た笑い声を聞いた事もあった。

最初の頃は、

妹や、トリス、ベルク等、村の人達の事を考える事もあった。

同じ奴隷の事を庇ったりする事もあった。

しかし、時が経つに連れ、何度も同じ事が起こるに連れ、感情が麻痺していったのだろうか、なにも思う事がなくなっていた。

ただひたすら、自分はどこにつくのだろうと

自分を買う人間はどこにいるのかと

いつ、この歩くだけの日々が終わるのだろうと

そう考えるだけになっていった

何処とも知れぬ地で

その日、何度目かの街に着いた日、
売られる為にと近くの川で身体を洗わされ、
連れていかれたのは、それまでにはあまり見た事がない、大きな屋敷だった。

何人も人間が働き、忙しく行き交うそこは、明らかに裕福な、そう、領主の住むような、そんな雰囲気のある場所だった。

お前からはなにも喋るなと言われ…すでに反抗する気もない…連れていかれた場所には、その屋敷の主であるらしき、風格のある男が待っていた。

「デイルケン、久しぶりだな。お前から訪ねてくる事があるとは」
「今回は、面白い商品があったからな」

若干嫌そうに…奴隷商人が直接来たからだろう…そういった男に、悪びれもなくそう言ったデイルケンはカイトに目を向けた。

「確かに見た目はそう悪くは無いようだが、別段力がありそうでもないし、特徴もなさそうだが？」

そう言った男にデイルケンは笑ながら、

「俺もパツと見は確かにそう感じるがな、これでなかなか、役に立つようだ。こいつを拾ったのはだいぶ東の農村の近くなんだがな、どうやらその農村を襲った盗賊を、結構な人数、弓とダガーで倒し

たらしい」

「…ほう…?」

値踏みするようにカイトを見るが、鼻で笑つと、

「そんな腕があるようには見えんがな…お前、名前は?」

「…カイト…」

「カイト…お前は、何が得意だ?」

と、問いかけて来た。

少し考えたカイトは、

「弓を少し…狩りができます…」

「ふむ…それだけか。で?この小僧をいくらで買えと?」

デイルケンはニヤリと笑うと言った。

「1エルム」

「バカな。たかが子供、それも狩りしかできない子供に1エルムとは…」

「しかし、それだけの価値はあると俺は見た。長年の、勘だ」
「……………」

それを聞いてじつところらを見て来る男。

なおも訝しげに見てくる男に、

「今は確かに弓しか使えないかも知れないだろうが、教え込めば使
い物になるかも知れんぞ?」

「しかし、1エルムはポリすぎだ。50レルム」

「80」

「…いいだろう。80エルム。ただし、使えなければ二度と貴様の所からは買わんからな」

そう告げた男にディルケンはニヤリと笑うと手を差し出した。

こうしてカイトの未来は、また別の人間の手に握られる事となった。

何処とも知れぬ地で（後書き）

1 エルム ≡ 10万

1 レルム ≡ 1000円

80 レルム ≡ 8万円

他の奴隷の平均が30レルム、力のある奴隷や普通の女が50、見た目のいい女が80、特に良いものが1〜1.5エルム

そう考えると、ディルケンはだいぶ足元見えますね、はい。

新しい生活 - 1

「ついて来なさい」

そう言われ連れて来られた場所は、広大な敷地の端にある、大きな森の側に建っていた小屋だった。

意外にも綺麗な見た目の小屋に連れて来られ、何をするのかと戸惑っていたカイトに「入りなさい」と促され、自身もその小屋に入ろうと…扉を開けた、おそらくこの屋敷の使用人らしき人物は、中を見て、眉間に皺を寄せた。

何故動きを止めたか気になったカイトは、そつと脇から中を覗き込む…と…

…き…きたない…

思わず「…うつ…」とつめき声をだす程に、小屋の中は酷く…で済むのだろうか…散らかっていた。

足元には元が何かもわからぬ、辛うじて食べかけの食料か？と見られる“ナニカ”や、新しく何かを作っているのか？よく分からない部品などの欠片や塊、着古された衣服などが積み上がり、文字通り“脚の踏み場も”なかった。

他にも、何故ここにあるのか分からぬ鋏やら木の棒などが立ち並び、「倉庫か？」とも思いたくなる小屋で、いったい何をするのだろうか、チラリと件の使用人の様子を伺うと、眉間に深く…本当に深く皺を寄せ…

「片付けます。手伝いなさい。」

抑えきれぬ怒気を孕んだその声に、カイトは只、頷くしかなかった。

何をどうすればいいのかわからないカイトに、「アレはこっちに」「それはあつちに」等と支持を飛ばし、部屋を片付け続けていた使用人“フィリップ”は、やっと片付いてきた小屋内部を眺め、はあ…と溜息をついた。

ここに住む男は、いつ訪ねてもこんな風に部屋を散らかし、その度に自分が掃除をしていた。俺は掃除夫では無いのに…などと考えつつ、今日からこの屋敷に住む事になる奴隷…カイトといったか…を、横目でチラリと伺った。

主に呼び出され応接間に赴けば、例の“奴隷商人”が持つて来た奴隷を買ったと言われ、ここに連れて来て渡すように命じられた。別段奴隷を買う程困っている事があるわけでもなし、唐突に買う事になった奴隷を、どうせあの薄汚い商人にあれこれ言われ買わされたのだろう、そのどうにも平凡な少年を見て、ほんの少しだけ憐憫の表情を向け…しかしそれが仕事なのだと言い聞かせ、あれこれと支持を出す。

実際、使えない少年では無いようだ。

言った事には素直に返事をし、どうやら文字も少しは読めるらしい…先程本の整理をしていた…まあ、教え込めば使えるのだろう。し

かし、この小屋の主に果たしてそこ迄の期待ができるだろうか…と
考え、フィリップはまた少し頭が痛くなった。

新しい生活 - 2

小屋の掃除も一段落し、思わず溜息が出た所で、帰って来ない小屋の主に業を煮やしたのか、あの使用人が声をかけて来た。

「君、名前は？」

「カイト…といます」

それまで特に会話らしい会話をしていなかった為、虚を突かれたカイトは、少し緊張しながら返事をした。

「ふむ…私の名前はフィリップだ。この屋敷で、使用人として働いている。奴隷の管理も私が受け持っていた。君が来る迄はいなかったがな」

冗談を交え、ニヤリと笑いながらそう言った使用人…フィリップを見て、緊張しているのがわかったのか、気分をほぐそうとしてくれたのか、おかげでカイトはすこし気が楽になった。

「君は運がいい。この屋敷の主、アベル様は、とてもお優しい方だ。他の所と違い、君にも人としての生活はさせてくれるだろう」

優しく微笑みながらそう言われ、ほっと胸をなでおろしたのも束の間「だが…」と続けた彼の目に射竦められ、思わず息を呑む。

「だからと言って、怠けたりなどしたら、当然罰はある。いくら優しくとも、甘やかしはしないだろう。覚えておく様に」

身体に緊張を走らせ、かすれた声で返事をするのと同じ、小屋の扉

が開き、一人の男が入って来た。

「おうフィリップ！相変わらず真面目にやってそうだなあ！で？なんでうちでこんなガキをいじめてやがんだ？」

そう言っ入って来た男は、簡素なレザーアーマーを着込み、腰にショートソード、背中に弓を背負った、どう見ても冒険者か狩人しか見えなかった。

なんでこんな所に？などと思っていると、

「今日、旦那様を買われた奴隷を連れて来たんですよ。ここに連れて来る様にと言われたので。」

「ほー…見た目はひよろつちそうだが、使えるのか？」

「さあ…少なくともバカではなさそうですが…使えるかどうかはあなた次第でしょう」

それではこれで…と、小屋を出ていったフィリップを送り出したあと、冒険者のような人がこちらを振り向いた。

「とりあえず…メシだ！腹が減っちゃなんにもできやしねえ、お前も腹が減ってるだろう？こっちにこい！」

引きずられるように連れていかれたカイトは、少しだけ、明日からの生活が不安になっていた。

新しい生活 - 3

「で、お前は何かができるんだ？」

唐突に切り出され、言葉を失うカイト。食事をしている手も止まっていた。

狩ってきたのだろうか？ラビやホーン等の肉と、ライと呼ばれる植物の種子を煮込んだ物を差し出され、「こんな物しか無いが、好きなだけ食え」と言われたのは四半刻程前。

ここ数ヶ月とは比べられない程良い物を出され、戸惑っていたのも数瞬、鳴った腹の音に顔を赤くし、貪り様に食べていた結果、鍋の中はほぼからになっていた。

カイトの食べ様を面白そうに見やり、自身も負けじとかつくらっていたその男：ガゼットといったか：は、落ち着いた所を見計らい、そう切り出していた。

彼としては別段おかしな問いではなかっただろう。むしろ、当たり前
前の疑問でもある。

と、言っても、彼の所に連れてこられたからには、やる事はそうあるわけでもなく、その中の何をさせるかを考える為に聞いた迄だ。

だが、世間一般ではとてもおかしな事でもあった。

奴隷と言えば、言われた事に絶対服従、アレをしろ…と言われれば、有無を言わずやらされる。当人ができる、できないは関係無いのだ。

この人は、あまり奴隷を扱った事が無いのだろうか？

などと、奴隷歴数ヶ月のカイトがバカな事を考えつつ、「言われた事ならなんでも…」と、答えたのを聞き、ガゼットは少し困った様な顔をした。

「ん〜あ〜…お前は、ここで何をやるか聞いたか？」

黙って首を横にふるカイトを見て、嘆息するガゼット。「あのぼっちゃん…軽い説明くらいしとけよ…」と、一人愚痴ると、改めてカイトを見やった。

「よし、ならここでの仕事の説明から始めるか。俺はここで、森から出て来るモンスターの退治、それと肉類の食料の調達をしている。お前がここに来たのは、その補佐と言った所だろう。まあ、今迄俺一人でどうにでもなっていたから、人出が必要って訳でもないんだがな」

「モンスター…が、出るんですか？」

その言葉に、内心ヒヤリとさせられる。

モンスター…人を襲う怪異

と、言っても、全部が全部、人を襲う訳でも無い。

先程食べていたラビヤホーン、以前村で狩っていたボア等、草を食べて生きる比較的穏やかな物も多い。

人語を解する物もいる位だ。むしろそちらのほうが多い。

だが、問題は、その少数派になる、人を襲う物たちのほうだ。

人を襲う。それが出来る程の力を持ち、存在する物。それらを総じて“モンスター”と、人は呼んでいた。

つまり、この森には“人を襲うモンスターが出る”という事。

その事を理解し、緊張するカイトを見て、何故かニヤリと笑うガゼット

「成る程、確かに頭は働く様だ。だが、心配しなくていい。もう滅多な事じゃこの森からモンスターが出て来る事はない。基本は2日か3日おきに森に入って、獲物を狩ってくる。後は、裏手の畑の世話やら…後は、薪割り位か」

それを聞いて安心した。そうでないならば、四六時中モンスターの襲来に気をつけていなければいけない。休む間もなく警戒し続けるのは、死ねと言われるも同義だ。

いくら、奴隷になったからといって、簡単には死にたくない。

「だから…お前が何ができるか聞いたんだ。あしでまといは連れて行きたくないからな」

ほっとしていたカイトにそう告げるガゼット。若干ニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべている様な…

「弓と、ダガーを少し。でも、いいんですか？刃物持たせたりしちゃうまじいんじゃない？」

ちよつとムツとしたカイトが少し投げやりに答えると、なおも面白そうに笑うガゼット。

「お前位のガキが刃物持った所で、何も怖くはない。素手でも叩きのめせる」

さらにムツとしたカイトに、さらに追い討ちをかけるように

「それに、お前の右手の“ソレ”がある限り、ここから出たとしても、何も変わらんぞ」

…そう、奴隷になった事でつけられた、この右手の“奴隷の証”は、一生涯奴隷である事を刻む物。

本来首筋等に多くつけられるそれは、主人に解放の証である、別な刺青を彫られる迄、奴隷である事を示される。

もしここを自力で出た所で、別な人間にそれを見られ、捕まれば、また容赦なく奴隷である事を強いられる、魔の鎖。

その事を思い出させさせられ、俯くカイトに、少し言いすぎたとちよつと申し訳なさげなおそをしたガゼットだったが、気を取り直したようにまた説明を続けた。

「まあ、そうゆうことだ。ダガーは生憎持ち合わせがないから、代わりにショートソードを使え。俺の予備を貸してやる。弓もな。矢は自分で作れ。それから、これから薪割りはお前の仕事な」

狩りは今日はやって来たから、薪割りと、獲物をいくらか干し肉よ

うにしておいてくれ。

そう言い残し、後は任せたとこる寝をはじめたガゼットに、ほんとは大丈夫なんだろうか、この人は？と、どうにも釈然としない気持ちで、仕事を始める為に表に出るカイトだった。

それから、矢のように月日が過ぎて行った。

ガゼットの行ったとおり、モンスターが出る事はなく、数日置きに入る狩りでも、苦勞する事もなく獲物を獲っていった。

元々狩りをしていた事もあり、ガゼットの力量もあつてか、必要がない程獲ってしまった事もある。そんな時は全て干し肉にするか、街に使用人が売りに行っていたようだが。

畑の方も特に手がかかる事は無く、とつた野菜も自分達が食べるだけの物なので、特に気負いなどもなかった。苦勞したのは薪割り位だろうか。

だがそれも、2年を過ぎた今は、全く区も無く出来るようになり、毎日の様にやっていたせいか、体つきも一回り…いや、2回り程も大きくなっていた。

もう子供と言われる事もないだろう。

時折暇を見ては稽古をつけてくれたガゼットのおかげで、ショートソードの使い方も少しはマシになっていた。

そこらの野盜数人位なら、苦もなく圧倒出来る程に。

弓の方もだいぶ腕が上がり、空を飛ぶ鳥も射落とせる様になっていた。

これは、もともと不器用だったのだろうか？ガゼットよりも腕が上がり、彼を苦笑いさせていた。「俺は必要ないんじゃないか？」という冗談とともに、毎度の如くサボろうとする言い訳に使う様になっ
ていたが…。

しかし、新たな日常になっていたそれらは、とある一人の人物によって、粉々に打ち砕かれる事となる。

とある、一人の“お姫様”によって…

新しい生活・3（後書き）

まだまだ書く文章量がわからず、部の長さが短くなっていますが、徐々に量をあげていけたらな…などと思っています。

出会いは唐突に

その日もカイトは、ガゼットと共に森の中に入っていた。

今日はいつもと違い、出来るだけいい“獲物”を獲るべく、かなり深い所まで潜っていた。

と、いうのも、今日からしばらくの間、ガイランド家へ王城の姫君がお出でになるというのだ。

カイトが飼われているガイランド家の当主、アベル・ガイランド。

どうやらこの人は、ただ腕のいい領主……というだけではなく、王城の姫君の世話を任される程に力を持つ存在らしかった。

何故それ程の力を持つ存在が地方領主で収まっているか等、謎も多かったが、ただの奴隷には関係がない話。

自分の仕事は、ただいい肉を狩り、持って行くだけ。

そう割り切り、弓を手に、森の中を疾駆していた。

今回は普段来ない森の奥という事もあって、普段よりも警戒しつつ、飛ぶ様に森の中を奥へ奥へと走り抜ける。

足場が悪い森も、何年もの間狩人として過ごして来たカイトやガゼットには、少し足場の悪い庭程度にしか感じられず、まるで飛ぶ様に木々の間をすり抜け走る。

時折止まっては気配を探し、手で合図を送っては獲物を追い求めるカイト。

その姿を見やり、「もうお前は人間というより動物と言った方が正しいかもしれない」と、苦笑混じりにガゼットが言っていたのは3ヶ

月ほど前だった。

先行していたカイトは、強烈な気配を感じ、慌てて気配を殺す。

この先に何かいる…

ゆっくりと、慎重に歩を進めたカイトの前に現れたのは、人よりも遥かに大きな巨体を持つ一頭の獣。

今迄に見た事もない、その桁外れの存在感と巨体に息を呑む。

じつと気配を殺し見つめていたカイトに、いつのまに近づいたのか、隣に屈んでいたガゼットから「あれは…ガイラルベア…か」と、溜息にも似た声が漏れる。

「あれは、ここいらにいる魔物の中じゃ頭一つ飛び抜けた力を持つ。

そこいらにいるモンスターよりも夕チが悪い…」

「…避けますか…?」

その言葉に危機感を抱き、安全策を取ろうかとしたカイトに、「いや…」と、いつもの様に意地悪な笑みを浮かべ、

「確かにいつもなら無理に狩る必要も無いが、今回は特別だ。何より、あいつの肉は、美味しい」

そういう事ならと、顔をあげ、狩る為の段取りを考えていく。

あの巨体だ。真っ正面からやりあっても勝ち目は薄い。死角から急に矢を叩き込むか…等と考えていると、何の気配を感じたのか、

ふっ…と獲物が顔をあげた。
バレたか？と肝を冷やしていると、何処かへと歩み去っていくガイルルベア。

ここで逃すのは勿体無いなど、ガゼットと二人、そつと後を追っていく。

気配を殺し二手に別れ、どこ迄いくのかと後を追いつける事半事。

そろそろ森野はずれじゃないかと、記憶を頼りに自身の位置を確認していると、唐突に獲物の先から「ひっ…！」と言つ悲鳴の様な物が聞こえて来た。

声が聞こえて来た方に目を凝らすと、森には不似合いなドレスを着た少女が、同じく不似合いな侍女服を着た少女を庇う様に、腕を広げ、魔物の前に立ちはだかっていた。

これは…まずいだらう…ッ！

慌てて飛び出ようとするカイトを目で抑え、ガゼットが手で支持を送ってくる。

こいつの注意を俺に向ける。いくらか傷を負わせるから、とどめはお前が刺せ。

了解の合図を手で送り、腰の剣に手を当てていつでも飛び出せるように腰を落とし呼吸を整える。

失敗は許されず、一刻の猶予もない。

焦りにも似たその感情を抑え、待ったのも束の間、ガゼットがいた反対方向から矢を飛んだ！

射られた矢は真つ直ぐに飛び、狙い違わず獲物の脇へ。

一瞬やったか！？と思ったが、予想以上に皮は厚いらしく、先端が刺さるだけだったようだ。

突然の攻撃に驚き怒ったガイラルベアは、その矛先をガゼットへと向け、思い切り地を蹴った！

その勢いは凄まじく、あっという間に距離を詰めていく獲物にカイトは、驚くと同時にしまった！と慌てて地を蹴る。

しかし、獲物の勢いは凄まじく、あっという間にガゼットへの距離を縮めていく。

間に合わない…ッ！

必死に走るカイトを横目にみるみる近づく獲物を前に、ガゼットがチラリとこちらを見て、意味深な笑みを浮かべた。

それと同時に、ブツブツと何事かつぶやいていたと思ったら、突然片手をあげ、まるでガイラルベアを止めるかの様に手のひらを向け、吠えた！

『フレイム！』

すると、掲げた手のひらから唐突に炎の塊が現れ、向かって来たガイルルベアの鼻面に直撃した！

いきなり現れた火球を顔面にぶつけられ、狂ったようにもかくガイルルベア。

隙ができた！今しかない！！

瞬時に判断したカイトは、腰の剣を抜き、獲物の腕の下を抜け胴の下へと抜けるやいなや、頭上にある獲物の首筋へと一直線に剣を突き立てた！

しかしそれでも即死しなかったのか、腕を振り上げカイトへと振り下ろそうとしたその瞬間、カイトの背後にいたガゼットが弓を一閃。飛び出した矢は一直線に額へと突き刺さり、それと同時に力尽きたのか、その巨体を地へと投げ出した。

危なかった…

初めて遭遇した種類の獲物だったといっても、危険だった事には変わらない。ガゼットがいなければ、倒れていたのは自分の方かもしれなかった。

知らず流れていた冷や汗をぬぐい、それにしても…と後ろを振り返る。

その的確なサポートだけでも凄いのに、さっき見たアレは、確かに…

「魔法…ですか…」

「そついや初めて見せたか？まあ、使いどころなかったしなあ」

と、とぼけるガゼットの言葉に、はあ…と溜息が漏れる。

魔法。

言うだけなら簡単だが、それを実際に使うのは恐ろしく難しい。

遙か昔は、大地に魔法の源となるマナが満ち溢れてはいたいたらしいが、今の時代ではほぼ枯渇し、魔法は己の体内に宿るマナを使う事では行使できなかつたはずだ。

それを、まるでちょっと出来のいい手品を使って見せるかのごとく出し、さらにそれを当たり前の如く言う。

前から思っていたが、本当にこの人は、得体が知れない…

そんな思いをしつてか知らずか、サクサクと歩を進め、狩った獲物の血抜きなどをしている様は、どこからどう見ても、むさ苦しいただの狩人でしかなかった。

出会は唐突に（後書き）

ラビ＝野うさぎ

ホーン＝鹿

ガイラルベア＝3m位の巨体を持ったクマ

って所でしょうか。

熊鍋おいしいよ熊鍋

面倒な客人

「そのほづら！たいぎであった！」

手にした剣についた血油をぬぐい、どうやってこれを持って帰ろうか等と考えていると、倒れたベアの向こうから、小柄な少女が近づいてくるのが見えた。

「そなたらのゆづし、しかとみとどけた！」

…うん、

ちよつと舌足らずな感じで偉そうにしゃべるその子は、きっとその手の類の趣味の人には、とても可愛く思えるんだろうなあ。

そんな感想を抱きつつ、どうするんです？と、ガゼットのほうを見るやる。

どうやらガゼットも少し困っているらしく、ちよつと考えた末に声をかけた。

「お嬢ちゃん、ここいらは魔物の数が少ないといっても、お嬢ちゃんのような可愛い子供が入って来ていい場所でもない。そっちの子と一緒に、早く帰りな」

…もうちよつと言い方を考えられないのだろうか…。

軽く頭を抱えつつ、それでも言いたい事はほぼ同じであるカイトは、黙って経過を見守る事にした。だが結果は様相道理…

「姫様になんて無礼な口を！一介の狩人が、ただ顔を合わせるだけでもありがたいと言うのに！」

「よい、あのものがいつていることもどうりじゃ。たしかにこのような森にかかるがるしくはいるべきではなかった」

…予想外に後ろの、恐らく同じくお嬢様を諫めるであろうと思つていた侍女に抗弁され驚く2人。そしてそれを逆に諫める“お姫様”

「しかし、命をたすけられて、なにもせぬままたちさるのも、れいぎにもとる。そのほうら、名前はなんともうす？」

「…俺の名はガゼット…こっちはカイトだ」

「そのほうらの名前はしかとおぼえた。いずれこたびのれいにまいろう。それではな」

そう言つて森を街道の方に歩いていく。その彼女を追い、不機嫌なまま付いていく侍女。

なんとなしに顔を見合わせ、どうしたもんかなあなどと考えつつ、とりあえず獲物を持って帰るのが先決と、どうして運ぶかを考える2人だった。

バラすと逆に大変だからと、2人がかついで屋敷に戻り、味のいい部位だけを選んで屋敷に持って行くカイト。

それでも一抱え以上の大きさになり、汗を流しながら厨房に持っていくと、ちょうど中からフィリップが出てくる所だった。

「おや、今回はなかなかいい獲物がとれたようだね」

「はい、だいぶ奥の方迄行っていたので」

あれからだいぶ時もたち、その間何度も顔を出してくれていたフィリップとも、だいぶ親しくなっていた。

「今回の獲物はなんだったんだい？」

「ガイラルベアです。端の方はよけてきました」

「なるほど…なら夕食が楽しみだな。お姫様もきつと満足するだろう」

普段なかなか出ない食材に満足そうに頷くフィリップ。だが、その言葉にふと、危機感を覚えた。

「お姫様…今日来られるので…？」

「ああ、どうやら少し早めに着くらしい。道中で何事があったようだな。お陰で大忙しだよ」

そう苦笑いで返したフィリップの言葉も半分ほどしか聞こえていなかった。

姫様

たしか、あの侍女もそう言っていた。
…変なことにならないければいいが…。

不意に、ぞくりと背筋を悪寒が走ったような気がした。

肉を運び終え、そういえば何故わざわざお姫様がここ迄くるんだろ
う？なんて事を考えながら屋敷を出ると、丁度正門の所に、きらび
やかな馬車が止まるのが目に付いた。

嫌な予感がして、足早に立ち去ろうと背を向けた瞬間：

「おお！そこのおぬし！もしやさきほど森で会ったものではないか
！？」

その喋り方と声に、思い当たるのは一人…
恐る恐る振り向いたその先には、この家の当主に迎えられる、一人
の小柄な少女がいた。

呼び止められたからには逃げるわけにはいかない。半ば諦めの境地
でそちらに向かうと、満面の笑みを浮かべた姫様と、訝しげな顔を
しているガイランド家のもの達が待っていた。

「やはりおぬしだったか！まさかこの家のものだったとは…さきほ
どは助かった！あらためてれいを言うぞ！」

「失礼ですが姫様…この者と知り合いで…？」

無礼を承知で話に割ってはいる当主。

それもそうだ、自分の家の奴隷が、まさか主君の姫君と知り合いであった等、笑い話にも出来ない。

「いや…来るとちゅうで馬車からペットがにげだしてな。それをつれもどすために森へ入ったら、巨大なまものにおそわれたのじゃ」

それを聞いて驚くアベル。姫君がいくらこちらに全く非がないとしても、任されている領地内で怪我でもしたとあらば一大事だ。

「そこへこのものと、もう1人ベアのようなものがあらわれてな、助けてもらったのじゃ」

「なるほど…」それならば納得。というより、家の危機を救われたようなもので、むしろ家からも何か褒賞を出さねばならない位の事でもあった。どうしたものかと考えていると、

「して、さきほどはきちんと聞きそびれたが、そなたのほうは何かほしいものはないか？わらわにできる事ならばなんでもよいぞ」

しかし、そう言われても特に何も出て来ない。そもそも、奴隷が何か望むという事自体がおかしい気がするし、ガゼットの方も「いらねえ」と一蹴しそうな気がする。

結局「私は奴隷ですから、褒美なんてとても…」と、ありきたりの言葉を告げて辞去させて貰おうと口に出すと、逆にその言葉を聞いて彼女の瞳が輝いた。

「ほう！おぬしはどれいなのか！？あれだけのうでを持ちながらどれいとは…もったいないのう…ならばどうじゃ、わらわの元に来ぬか？」

その言葉に至っては流石のアベルも黙っていられず、「お待ちください姫様」と、割つてはいる事を余儀なくされた。

流石に姫様でも、いきなり奴隷を持って帰り、さらにそれを側に置くなど考えられない。奴隷を所有する事すらあり得ないのだ。

切々と説こうとするアベルだが、なかなか姫は言う事を聞かない。拳句、

「ふむ、そういえばこのものはそなたの奴隷であったな。ならば、わらわがこのものをそなたから買えばよい。いくらじゃ？5エルムか？10エルムか？」などと言い始める始末。

どうしたらよいか…と頭を抱えていると…

「ありがたいお言葉なのですが、私などが姫様のお側にいても役に立てる事などないでしょう。アベル様にも、とてもよくしていただいております。ですから、もうそのお話はこれで…」

と、カイトが言った事で姫もようやく折れたのか、「ならばしかたないのう…」などと肩を落とし、心底残念そうに言った。

「ならば、後日またほうびの話をするでしょう。わらわの名前はアリシア・ローゼスハイトじゃ。おぬしのなまえはもうおぼえた。ゆえにわらわのなまえ、しかとおぼえておくのじゃぞ？」

そう言い残し、颯爽と屋敷の方へ去って行った。それを慌てて追うアベル他一同。そのほぼ全員が鋭い視線をカイトに投げて行き、なんと居心地の悪い思いをする事になった。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 1

その日アリシアは、遅く迄物思いにふけていた。

あの奴隷の青年…カイトといったか…彼が、どうにも欲しくて堪らなかつたのだ。

彼の年齢は17と8といった所だろう。

その年で、ガイラルベアという、大人でも手こずる相手を軽々と倒してのけたのだ。

その才能は皇都でもなかなか見れない。

その上頭もしっかりしているようだし、今からきちんと鍛え上げれば、近衛になつてもいい所迄いくだろう。

欲しい…

あやつが欲しい…。

等とブツブツ呟きながら部屋を時折立ってはウロウロ歩き回り、ふと何かに気がついたように顔を上げた…かと思えば首を降り、また椅子に座る。

そんな怪しい皇女の姿を、「また始まつた…」だとか噂をする女中達。その上中には、「まさかあの年から男あさりを…」等と、不敬罪とも取られかねない…むしろそうとしか思えぬ発言をするものもいた。

だが、当のアリシアはといえば、そんな事など全く気づかず、只々どうすればカイトを自分の元へ来させるか。それだけしか考えていなかった。

しかし、この事をカイトが知れば、そのあまりの突拍子も無さに額然としていただろう。

彼にしてみれば、あの戦いで手を出したのはただ一度。

しかもそれさえとどめを刺せず、あのまま腕が振り下ろされればただでは済まなかっただろう。

そんな戦いが評価されてもどうしようもない…。

しかし、アリシアからしてみれば、全くの謙遜…となる。

少なくともアリシアが立っていた位置からは、弓を射たガゼットの側へと向かっていたガイラルベアへ、勇猛果敢に飛びかかり、腕をかいくぐって喉へ一突き！

ガゼットが魔法を使った事も、首から剣を生やし、なお襲いかかるうとした所に矢を額に突き立てる…などといった所は全く見えなかったのだから。

普通は剣を首に突き刺されたら生きてはいられない。

だからベアはあれで死んだのだ。

おまけに、髭の生えたむさくるし男より、顔のそこそこ整った若いものの方が…といった所でだいぶ美化されてもいたが。

結局のところ問題は、どうやってカイトを自分に側におく口実を作るか。

色々と頭を捻った挙句そう結論づけたアリシアは、翌日アベルにこの案をのませるために、あれやこれやと作戦を練るのだった。

翌日アリシアに「カイトの件について話がある」と言われたアベルは、どうしてくれるようかと途方に暮れていた。

と、いうのも、今回アリシアがガイランド家に来ている理由は、『社会勉強』という意味合いが強い。

どうしても世襲制の問題点となる、“限られた世界で過ごすうちに固定される視点”というのは、その制度からして避けては通れない。

皇族はどうしても狙われやすい。

だからこそ、万全な皇城に住むのであって、

決して権力を振りかざすためでも、贅沢をしたいからという訳でもない。

だが、そこで常に生活をする内に、どうしても考え方は歪んでしまう。

限られた場所で、限られた人にしか会わぬ生活。

それは歪んでいるとしか言えない。

価値観、考え方は、どうしても会う人間、生活する場所で変わってしまう。

皆が皆同じ生活をしているのならばそれでもいいのかもしれない。

だが、世界というものは違う。

目覚め

あるいは家事を

あるいは仕事を

人々はこなし、それによって生活していく。

その生活は千差万別。

ひとりとして同じものはない。

だからこそ法は、力無きもののためにあり、

その為に力を振るうのが、皇族たるものの義務でもある。

しかし、一部の者しか見えぬ場所においては、如何に賢者と言われようと、その目を曇らせてしまふ。

それが幼子ならば尚更に。

そして人は、自分が一度も見た事がないものは、想像すら出来ない。

だからこそ、このローゼスハイト王国の皇族には、各国にはない、とある義務が課せられている。

『 齢10を数えた皇族は、その領地内にあるいずれかの家に赴き、1年間生活すべし。その間その者は皇族としてではなく、“1人の人間”として生活し、街に赴き、己の生活を支える人々の生活をよく目に焼き付けるように。そして皇族としての義務を、しかとその心に刻むべし』

それがローゼスハイト皇族に課せられる義務であり、それをもって、晴れて皇族として受け入れられる、ある種の試練でもあった。

この考えが根幹にあるからこそ、ローゼスハイト王国は、1000

年の長きに渡り、その国土を維持し、大国としてこの大陸の中央に位置し続ける事が出来たのだ。

そういう意味では、魔物に襲われ命の危険と、その尊さを知るきっかけになり、奴隷という社会の仕組みに触れるきっかけにもなった。それはきつち、彼女の得難い経験の一つになるだろう…とは思う。思うのだが…。

「奴隷を連れ帰る側に召し置くのは流石に…冗談としても笑えんな…」

“ 奴隸 ” という名の存在価値 - 1 (後書き)

社会見学システムは、以前から考えていた、専制君主、及び王権と民主主義政権との弊害その他を考えた時に、ぼんやりと考えていたものを使ってみました。

一応これだけでなく、他にもあれこれと制限などもあるんですが、それはいつか機会があれば晒そうかな…と。

それのお陰で、ローゼスハイト皇国は、多少のいざこざや問題はあ
るものの、他の国に比べれば、しっかりした土台と平和な生活が長
く続いている大国であり続けています。

専制君主は、意外と悪い事ばかりでもないのですよ。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 2

アベルは、応接間にあるソファに深く身を沈め、驚きと、喜びを感じながら、その話を聞いていた。

「だから、わらわは、どれいかにほづの為の手段の一つとして、カイトを側におきたいのじゃ！」

強気に、はっきりと自分の意見を主張する目の前の幼子に、アベルは今はっきりと喜びを感じていたのである。

奴隷解放

その事になにか思い入れがある訳でもない。

カイトが欲しいから

ただその為だけに、彼女は理路整然と、奴隷解放という手段を使おうとしたのだ。

それも、そこらへんの大人なら考えもつかないほどに、きちんと、はっきりと“ただしさ”を全面に主張した、反論の余地が無くなるほどのものとしてまとめ上げたものを…だ。

これほどとは…

以前から聞かされてはいたが、ここまで賢いなどとは思ってもしなかった。

思いつきにすぎないにせよ、その思いつきを確かなものとすべく、自分の知識を使い、現実にする手段として作り上げられるとは…。

彼女が提案した事とは、簡単に言えば、

『奴隷制度とは間違っている。人はあくまで人なのだから、ちゃんと人として生きるべきだ。』

だから、その為にカイトをまず自分が召し抱え、その姿を国民に見せる事で、奴隷とて一国民である事を民衆に理解させ、それと同時に奴隷達にも希望を持たせ、しかるのち、きちんとした制度を決め、順々に奴隷を開放していく』

というものだった。

細かな制度等は考えていない。出世するカイトだけが特別…等と考えられる視点の問題もある。

しかし、自分の言葉を使い相手を説得するその力。

恐らくは上に立つものが振るう力の中で、一番大切でがなかるうかと思えるそれを、その資質を見せたのだ。

その知略をもつて、ローゼスハイトの重臣たる席をもつアベルにとつては、そこが戦場であり、その戦場でれば、どんな敵にも勝つ。

それ程の意思と力を持ったアベルを説得するのは難しい。

王からも、「お前を頷かせるのは骨が折れる」と言わせた程だ。

その自分が、ほんの少しでも良しと思えるものを、たかが10歳の
子供が持ってきた。

… 将来が楽しみだな…

しかし、この子は知らなければならぬ。
何故奴隷がいるのか…を。

「成る程、確かに言う事はごもっとも。しかし、奴隷制度をなくす
事は不可能なのです」

「なぜじゃ…？」

「第一に、奴隷制度が深く社会に浸透している事。

たとえば言うならば、貧しい民家が子供を売る事で生き延び、
それを買った奴隷商が売る。

売られた奴隷は働き手となり、それを所持する事が、財産とな
る事もある。

まずこれを無くすには、貧しい民家が、子供を売らずに生活し
ていけるようにしなければならぬ。

そして、仕事を失う奴隷商や、そもそも奴隷達にも、仕事を世
話しなければならぬ。

さらに、今迄奴隷達がして来た仕事を、だれかがせねばならず、
また、奴隷という財産を無くすもの達にも、なんらかの保証をせね

ばならないでしょう」

「むう…だが、それはおいおいとして…」

「そしてなにより、何故奴隷が生まれたか…と言う事です」

「…どういうことじゃ？」

「我が国…いや、この大陸は、長く、本当に長く、戦乱というものを続けて来ました。」

一年として、完全なる平和がこの大陸に訪れた事はありません。必ずどこかの国と国が争って来ました。

そして、敗者には必ずその責が問われる。それには色々な形があります、その一つとして、負けた国は勝利した国に、簡単に言えば、金を支払わなければならないのです。

しかし、必ずしも金がある訳ではない。

この世界の奴隷、その始まりは、敗戦国が支払えなかった対価…その代わりとして売られた、捕虜達だったので

「……！」

「今現在この大陸にいるほとんどの奴隷は、元捕虜達でしょう。以前は問題も無かった敗戦国の支払いも、度重なる出費と、一度売り払った人権という物に、抵抗を持たなくなっているということもあります」

「しかしそれは…自国の者達ではないのか!？」

「ええ、確かにそうです。ですが、今現在それを続けている各国の上層部は、人を、物として、駒としてしか考えていたおりません。」

それに、国自体が無くなる事もよくある話ですから

「しかしそれではあまりにも…」

「それが、今のこの世界のありようです。」

決して褒められた物ではない。しかし、それを正そうとすれば、根本より変えるしかない。

「貴女にそれが出来ますか？」

「……………」

俯き、悔しそうに顔をしかめるアリシア。

だが、問題はそれだけではない。

「それに、他国の事を置き、自国でだけ…などと考えても、不可能なのです

それは、人の感情によるもの。

人はだれしも、上へ上へと登りたがるものです。特に、一度上
下が決まった世界に身をおけば。

だからこそ、人は己を研磨し、鍛え上げる。

ですが、人は上だけを見て生きていけないものではない。

上・下とは、上があり、下がある事で初めて成立するのです。

そしてそこには…最底辺というものが必要になる」

「それが…奴隷…と？」

「一般市民…それが、一番多く、そして一番大切な、国を成す要。

しかし、その要の大半が、この国での最底辺だと、それより上
に上がるのが、困難な道程だと知れたら…人はどうなりますか？」

上にいけるとわかるから努力するのであって、それが大半の人
間には出来ない事だと理解されたら…

「人は、臆病で、我儘な生き物です。

確かに、最初から奴隷等存在しなければ、比べる事など考えもしなかったかもしれない。

上下で考えるところでも、きっと市民の中での富裕だけで考えていたでしょう。

それだけでなら、なんとかあったかもしれない。

ですが、今はもう、はっきりと決められているのです。

奴隷がいるから、市民は底辺ではないのだと

「それが、理由か？」

「はい。」

人は、己の地位が脅かされそうになると、脅かそうとするモノに対して、ひどく残酷になれる。

そして、己の地位が確かにある事によって、疑いもなく生きていけるのです」

「わかった…だが…わらわは、今の話を聞いて、より、なんとかしたいと思うようになった」

「で、あれば、なんとかできるように、考えてください。」

それが、皇族に連なるものの使命でもありませんよう」

アリシアは、その言葉を聞いて、はっきりと目に強い力を秘め、部屋を出ていった。

…どうやら、今度のお守りは大変らしい…

ため息をつきつつ、確かにある胸の期待を感じながら、アベルは、彼女が出ていった扉を、ただ見続けていた。

“ 奴隷 ” という名の存在価値 - 2 (後書き)

奴隷に対して深く考えるきっかけを得たアリシア。今後はどうなっていくのでしょうか：楽しみですね。

ちなみに今回アベルがアリシアをこてんぱんにした理由としては、将来に期待していたというのもありんですが、

カイトをただ欲したからじゃなく、カイトを手段として、社会を変えたい事を望んだからです。

単なる思いつきでも、実際にそれをする力がある。だから、よく考えなさい、裏の裏迄。

そう言いたかったんですね。

ただの意地悪なオジサンではないのです

変わる日常変わらぬ平穩（前書き）

3000PV、ユニークアクセス6000突破しました！
これからも応援よろしくお願いします！

変わる日常変わらぬ平穩

あの日から、何かにつけあの少女がまわりついてくるようになった。

…というより、待ち伏せをされている感が否めない。

何がいけなかったのだろうか…というか、何故あの少女はこうも自分の居場所がわかるのだろうか？

見張られてでもいるのだろうか…

終わる事のない思考の螺旋に吞み込まれながら、カイトは始めてあったあの日からの事をなんとなく思い出していた。

わらわの奴隷になれ！…間違っではないはずだ…と言われたあの日。

偶然狩りの途中で出会い、図らずも命を助ける事となったあの少女。

もう二度と会う事はないだろうと思いつつ屋敷に帰れば、件の少女が訪れて、更に1年間屋敷に住まう事になるという。

おまけにその正体はこの国の姫だという。

…どこの御伽噺だ…

おまけに何をそんなに気に入ったのか、勉強の合間に暇を見つけては小屋に姿を現す。

お付きの侍従等も最初は穢れるだのなんだの言っただけで小屋から遠ざけようとしていたようだが、1月経った今ではもう、諦めたのか

なんなのがよくわからないが、我関せず…といった態度を取るようになってしまった。

勉強さえちゃんとしていればいいのだろうか？よくわからない。ただ一つわかっているのは…この、背中に刺さる、ねちっこい視線から、どうにかして逃げなければならぬ…という事だけだった。

「あやつは今日もくんれんかのう…あきもせずよくやることじゃ…」
「同じ台詞をそっくりそのままお返しします」

目の前でそんな事を漏らす少女の姿を生温かい目で見守りながら、マリア・ルピスは溜息をついた。

この目の前の少女…自分が仕えるべき主、アリシア・ローゼスハイト…彼女は、このガイランド家の屋敷についた次の日から、暇を見つけては、せつせとこの屋敷に飼われている奴隷の元に足を運んでいる。

最高級の手触りを持つメルク系のような光沢を持つ豪華な金髪に、淡雪のような白さを持つ肌。整った顔だつを持つ彼女は、ローゼスハイト皇国の第2皇女として申し分のない器量を持っている。
将来はさぞかし美しくなるだろう…見た目は。

問題はこの性格…皇女というには余りに好奇心旺盛…というか、後先を考えない性格のおかげで、ここに来る前から何度も…そう、何度も何度も何度も煮え湯を飲まされている。

そして今回のこれだ。

皇族であるならば、確かに一度は奴隷に触れる機会を持つべきだろう。しかしこれは…

先程と寸分違わぬ姿で目の前の奴隷の姿をじーーーーー……
っと見続けるその姿は…

「あつ！姫様！また何かはじめるようですよ！」

ここ一ヶ月で確実に回数が増えた溜息を吐き、マリアは、そもそもこんな事の原因を作り出したきつかけ…を作り出した存在に目を移す。

ルビア・ルビニア…そっかしくてドジな、何故姫様の侍従に選ばれたのかさえわからない、この見習い侍従が、あの子を逃がしさえしなければ…

流れるような足運び…

鋭い呼気とともに突き出される剣先…

まるで剣舞のようなその動きを目で追いながら、私は何度めかの溜息を漏らした。

… かつこいいなあ…

あの日、姫様が飼っているルリムを逃がしてしまい、森の中で大きな魔物に襲われた時から、彼の事が頭から離れなかった。

その日私は、アリシア様が1年間お過ごしになられるお屋敷にむかう馬車の中で、姫様が飼っているリルムの世話を任されていた。ふわふわの尻尾を持つ、そのとても愛らしい姿をした小さな生き物は、与えた餌を口いっぱい頬張って、カゴの中をぐるぐると走り回っていた。

かわいいなあ…撫でたいなあ…もふもふだよなあ…

なんて事を考えつつ、じーっとその愛らしい生き物を見つめ続け、例のあの森に近づいたあの時。

急にリルムが足を止め、じっと窓の外を見続け始めた。

どうしたんだろう？なにかあるのかな？

普通だったならその動きになんとも思わず…むしろ見てもいなかったのではないかとさえ思える…いただろう。だが、ルビアは気がついてしまった。

それが運の尽きだったのだろう。気がついてしまった彼女は、いつものように変わらず、楽観的に、かつ短絡的に考えてしまった。

窓の外が見たいのかな？

そう考えた彼女は、ちょっとだけなら大丈夫だよな？と考え、リルムを籠からだし、窓へと近付けたのだ。

一緒に乗っていた先輩侍従が注意した時にはもう遅く、彼女の手から一目散に駆け出した小動物は、あっという間に森の中に駆け込んですぐ姿が見えなくなった。

どうしようどうしようどうしようどうしよう

いきなりの事態に混乱した彼女は、「探してきます!」と言い放ち、森へと駆け込んだ。

姫様があの子を可愛がっていたのはよく知っている。なんとかして連れ帰らなきゃ…

それだけの思いで森の中に分け入り、ルリムを探してどの位が経っただろう。

一刻とも思えなし四半刻しか経ってないようにも思えた。

森の中を彷徨っていた彼女は、目の前の草叢がガサガサッと揺れる音を聞き、思わず「リリア!？」と、その子の名前を呼んでいた。

しかし、そこから現れたのは、そこらの大人よりも大きな巨体を持った、巨大なベアだった。

驚きと恐怖で身体が竦み、力無くへたり込んでしまう。

…どうしよう…逃げなきゃ…

なんとかそれだけ考えるも、どうやって逃げたらいいかなど考えられるはずもない。

どうしようどうしようと考えている間にも、一歩ずつ近づいてくる魔物に怯え、脚には全く力が入らない。

…私ここで死んじゃうのかな…?

不吉な考えが頭をよぎった瞬間、今度は背後の草叢が揺れ、何かが飛び出してきた。

また何かが出てきた！と、思わず首を竦め目を閉じる。

…怖い…怖い…誰か…

恐怖で塗りつぶされた心に、凜とした声が響く！

「退け！手を出すでない！」

反射的に目を開けた彼女が見たのは、己が仕える主。10にしかならぬ彼女が、自分の目の前に身体を晒し、大きく手を広げて自分を庇っている姿だった。

なんで！？なんで姫様がここに！！？？

驚きも束の間、今度は更なる恐怖が襲う。

自分の代わりに姫様が死んでしまう！

それでも力の抜けた四肢は動かず、魔物はどんどん近付いてくる！

誰か…助けて…！

先程とは違う祈りが天に通じたのか、どこからともなく飛来し

た矢が魔物の身体に突き刺さる！

突然の攻撃に怒った魔物はその身体を矢が飛んできた方向に向けて走り出す。

その後状況についていけない思考が辛うじて見出せたのは、唐突に響く爆音と、脇から風のように飛び出し、かの魔物に剣を突き刺し仕留めた青年の姿だった…。

その後馬車に連れ戻され、激しく叱られたあと屋敷に向け再出発し、ついた彼女達を待っていたのは、先程命を助けてくれた青年だった。

運命…そう、運命なの！

奴隷だとかなんて関係ない、これは運命なのよ！

自己完結した頭のなかで幾度もつぶやき、反芻した言葉を再度つぶやきながら、彼にひたすら熱のこもった視線を向ける。

彼女の主と同じ、しかし、微妙に意味の違う視線を、近くにある小屋に影から、ひっそりと…

変わる日常変わらぬ平穩（後書き）

ストーカーじゃん！

とかってツッコミは無しの方向で。

変わる日常変わらぬ平穩・2 (前書き)

なんだかアクセスがぽんつと跳ね上がって、嬉しいよりも怖ろしい
気持ち強い…

変わる日常変わらぬ平穩 - 2

きつと今日も何処かで見てくるんだろうな…

毎日の日課の鍛練を覗き見られるのは、正直あまりいい気分では無い。

というか、はっきり言うとお恥ずかしいのだ。

最初の方は、隠れもせず堂々と、当たり前前の様にやってきて、ソレはなんだ、コレはどうするのだと引つ切り無しに聞いてきた。

仕方がないので、やんわりと、丁寧に、遠回しに、邪魔だから来るなど伝えてみた。

それもはじめは伝わらず「妾の事は気にせずともよい！」だの、「妾はただ見ておるだけじゃ！」等と言っていたが…そうじゃなかったから言ったのに…侍従さんの方に視線で訴え続けたらどうか理解してもらえたようで、正面で居座る事はなくなった。…あの時は殺されるかと思っただけど…。

しかしそのおかげで、今度は何故か物陰から盗み見るようになってしまい、かえって面倒な状況になってしまっている。

どうしよう…いっその事森の中で…いや…もし森に中までついてきたら…

「相変わらず人気者だな」

いつしか手も止まり物思いに耽っていると、いつの間に来たのかフィリップが正面に立っていた。

「あ…こんにちわ、フィリップさん」

「で、どうしたんだ？ぼーっとして。」
「いや…集中できなくて…」

そう言っつて左手にあつた倉庫の陰に視線を移す。
その途端、顔を出していた2人の顔が慌てて引つ込んだ。

…いや…バレバレだから…

はー…つと溜息をつくカイトと、それを見て笑うフィリッ
プ。

「まあ、気にしていてもしょうがないんじゃないかな？…それより、
アベル様がお呼びだよ」

「旦那様が…？」

「ああ。いつでもいいから、執務室に顔を出して欲しいそうだ」
「…わかりました」

こんな状況じゃ鍛練にならない。先に話を聞きに行こう。
カイトは小屋に戻り剣をおくと、執務室へと向かった。

「失礼します」

「ん…カイトか、早かったな」

「ご用事があると聞いたのですが…」

「ん…まあ、座ってくれ」

そう言っつてアベルはソファに身を沈めた。

慣れない状況にカイトは、身体を力チ力チに固めてアベルの言葉を待った。

「話というのはな、お前に何か褒美を出そうと思っつてな」

「褒美…ですか？」

思わず首を傾げるカイト。何か褒められるような事をしただろうか？

「以前アリシア様を森で助けたといったな？あれの件だ」

「しかしあれは…」

「確かに、お前達の目的としても、あの獲物を狩る事だったから、結果…としてではないが、それでも結果は結果、事実として、お前達に助けられた。だから、何も無しではいかんだろう」

「それではガゼットの方に何かあげていただければ…」

「ガゼットには先に話した。しかし、あやつの方からもカイトになにかやってくれという事でな、お前が来てからだいぶ楽もさせてもらっているから…と言っつ事らしい」

「はあ…」

しかし、急に言われても、欲しいものなど何も無い。奴隷の身分なのに、お腹いっぱいご飯を食べられ、まともな寝床にありつける。それだけで十分だった。

「流石に…この時期に解放…というのは些か問題になりそうだから、それ以外で…何かないか？」

「望み…ですか…」

解放…は確かに嬉しいが、今更何処かに行く当てもない。それならばここで働いているほうがいいし…なに…か…

「もし…できたら…でいいのですが…」

「ふむ…？」

「妹と・友の行方が知りたいのです」

「ほう…」

それから、カイトは自分が奴隷となった顛末をアベルに語った。

村を襲った奴隷…それから逃げた村人…追手との戦闘…。

「なるほど…それで、生き別れになった妹の安否が知りたいと…」

「はい。場所も離れていますし、3年も前の事ですから、今どこにいるかも、何をしているか…生きているかもわかりませんが…」

カイトには、今、それだけが気がかりだった。あの日生き別れた妹…ちゃんと街に辿り着けたのか…今どこで何をしているか…。

「…わかった。時間はかかるかもしれないが、なんとかしよう」

「…あ…ありがとうございます！」

「あまり、期待はするなよ？」

「はい…探していただけのだけで…」

今までどうする事もできなかった事が、なんとかなるかもしれない。それだけで十分だった。

「ふうむ…なるほどのう…そんな事情があったとは…」

「姫様、流石にコレは如何なものかと…」

執務室の前、扉に身を寄せる2人の間者…ではなく、アリシアとルビアだった。

いつもよりも早く鍛練を終えた…既に時間などは調べ尽くしてある…カイトがどこに向かうのかと後をつけ、執務室に入った事から何かあったのではと、好奇心…いや、心配になって話を聞いていたのだった。

「そんな理由で奴隷になっていたとは…しかし、妹か…」

父に頼んで探してもらおうか等と考えていると、どうやらカイトが出て来るらしい。慌てて隣で泣いている…カイトの話聞いて感極まったのか…ルビアを引っ張ってなんとか隠れねば…と、慌てて去って行くアリシア。

その後ろを追いながら、どこでどう育て方を間違えたのだろうかと…と、本気で悩み始めるマリシアだった。

変わる日常変わらぬ平穩・2 (後書き)

はい、苦勞が耐えませんが、マリアは。

ルビアの天然ぶりがまたなんとも足を引っ張ります。

次回から少し加速していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6072y/>

蒼穹の竜騎士《ドラグナイト》

2011年11月26日00時56分発行